ソーシャルネットワークによる学びを支える大学図書館サービスのあり方の提言

理工学部電気電子工学科　講師　越　智　洋　司

1．はじめに

昨今、ソーシャルネットワークの時代と言われているように、TwitterやFacebookのようなソーシャルなサービスを利用する機会が増えている。これらのサービスを単なる「遊び」と捉えるのは軽率だろう。これらは「学び」を支える側面を持つ。本稿では、学びの場としてのソーシャルネットワークの可能性と、大学図書館がどうあるべきかについて提言したい。

2．学びとは何か

学びの場は、別に「学校」や「教室」の専売特許ではない。特に大学の専門科目の場合、たかが90分の講義で完全に理解できるように浅くはない。講義はあくまでも学びの入口であり、講義外での予習や復習、さらには講義の延長線上にある関連分野を独学していくことで、理解・修得していくものである。そしてその手段としての「書籍」というのは重要となってくる。皆さんも最低でも1冊は、「この本のお陰でわからなかった難題を理解することができた」、「この本を読んで自分の考え方が変わった」等、オススメの書籍（良書）に出会ったことがあるだろう。百聞は一見にしかずではないが、講義で先生の話を聞くよりも、書籍1冊が勝ることは少なくない。

3．ネット時代の書籍探しの問題

良書に出会うにはどうすればよいのだろうか？一昔前であれば、書店に行くことであり、書店になければ図書館で本を探すといったスタイルだった。しかし今は違う。書店にいかずとも、Amazonや楽天ブックス、生協ショッピングのようなオンライン書店を利用すれば、大抵の本は手に入る。これらは便利であることは間違いないが、「学び」の観点からいくとそうでもない。具体的には以下の問題を持つ。

（1）適切な検索キーワードがわからない

オンラインサイトで書籍を探す方法としては、一般的には「キーワード検索」が用いられる。キーワード検索というのは、本人の知識に依存する。つまり、自分で知っている言葉（ワード）でしか探すことができない。「学び」を目的とするユーザにとって、自分が直面している問題を解決するための検索キーというのは、必ずしも入力できるわけではないのである。

（2）適切な書籍がわからない

検索キーから出てくる結果（書籍の情報）はしばしば膨大となる。その中からどれが適切な本であるか？実際読んでみないとわからないものである。従来の書店だと、中身を見ながら比較して検討することができたが、オンライン書籍の検索ではそういった吟味が困難である。

以上のような問題は、オンライン書店だけではなく、図書館でも同様に起きる。現在、本学を含めた全国の大学図書館では、OPACに代表されるようなオンライン検索サービスも充実している。さらに本学では、各種データベースサービスの拡充が進み、新聞記事や雑誌、電子ジャーナルの検索・閲覧が行えるなど、扱う書籍は増えている。これは良いことではあるが、同時に前述のような問題が大きくなることを意味する。つまり、図書館はただ単にハード（書籍）とインフラ（OPAC）を用意すれば良いわけではないということで

ある。

４．ソーシャルな書籍探し

冒頭で挙げたソーシャルネットワークサービスは、従来のネットワークサービスが「情報」を見つけ出すことを主としているのに対し、「人と人との繋がり」に着目している点が異なる。そしてソーシャルネットワークの利点とは、単に繋がりのある「人」と出会うことだけではなく、その人が持つ「情報」や「知識」にも出会えるという点に大きな意義がある。

このようなソーシャルネットワークの枠組みを書籍に当てはめると、従来のキーワード検索型とは違った書籍探しの方法が見えてくる。それは、「その人が知っている書籍やオススメの書籍（良書）を探す」といったアプローチである。現在のAmazonにおいても、書籍のレコメンド（推薦）機能（「この商品を買った人はこれも買っています」）というものが存在するが、これは誰が買ったのか？買った人が専門家なのか素人なのか？自分と同じ知識量を持っている人なのか？社会人なのか学生なのか？といった情報は全くわからない。しかし、「学び」という場においては、「誰が薦めているのか？」という情報は重要になってくる。本学図書館でも「学生選書の会」というイベントが定期的に開催されているが、まさにこれはソーシャルな書籍探しにほかならない。そして「学生選書の会」にて選ばれた書籍に人気が集まるのは、ただ単に「学生の視点で選ばれた」というだけではないだろう。大学というのは、キャンパスという同じ場所、教育、文化を提供する１つのソーシャルコミュニティであり、「近畿大学」という同じコミュニティに属するメンバーが推薦する書籍だからこそ、多くの学生が共感を覚えるのではないだろうか。

５．ソーシャルネットワークと大学図書館

現在、読書や書籍に関係するウェブサービスは数多く存在する。全国の図書館を対象にした検索サービス［1］や、自分が持っている（読んだ）書籍の管理サービス［2］［3］等のデータベース的なものから、最近はSNS的な要素を強めたソーシャルブックレビューサービス［4］も出現している。このようなサービスが既に存在する中、大学図書館がソーシャルネットワークとどう向き合っていくか？２つのアプローチを提言する。

１つ目のアプローチは、「近畿大学の教職員・学生をユーザとして限定して、書籍情報の扱いに特化したSNSを作る」こと。ソーシャルネットワークというのは必ずしも人数が多ければ良いというものではない。最近ではPath［5］と呼ばれるクローズドなSNSサービスが注目を浴びている。Pathはユーザ数が50名と限定し写真・動画の情報交換に特化しているという特徴を持つ。対象ユーザをプライベートな知人に限定し、用途も絞り込むことでより現実とリンクしたコミュニケーションを図ることができる。このようなアプローチを参考にし、利用者を近畿大学の学生、教職員に限定して書籍情報の共有に特化したサービスを実現すれば、「学生選書の会」のような交流がSNS上でいつでも行えることになる。

２つ目のアプローチは、「CGM（Consumer Generated Media）のスタンスをとる」こと。CGMというのは「消費者自らがコンテンツを作成・提供していくこと」を意味する。本学の図書館には多数の書籍を所有しているが、それでも世に出回っている全ての書籍を所蔵しているわけではない。つまり、図書館がトップダウン的にコンテンツを管理・提供するというのは限界がある。一方、本学には多様な分野を学ぶ学生とそれを専門とする教員が多く集まっている。本学の学生、教職員は図書館が所有していない有益な書籍について知っている可能性があり、CGMの考え方に基づくと、その「知」を活かすことが重要となってくる。書籍を通した「知」の共有が行える場としてのポテンシャルを図書館は持っている。そのためには、ユーザ（教職員や学生）がコンテンツをボトムアップに築き上げていけるように、プラットフォームやツールを提

供していくなどのサービスの提供が必要となる。なお、前述のウェブサービスでは、スマートフォンやタブレット端末で容易に書籍情報を検索・登録できるようなソフトを用意しており、これらは参考になるであろう。

６．おわりに

「学びの場」として大学図書館はとても重要な位置づけであり、ソーシャルネットワークを利用することで、さらに魅力的な場所になる可能性を秘めている。図書館の利用というのは、必ずしも図書館への訪問者数や図書の貸出数だけでは測れない。そんな新しい時代がやってくる・・・と予感している。

参考資料

［1］カーリル、http://calil.jp/
［2］ブクログ、http://booklog.jp/
［3］MediaMarker, http://mediamarker.net
［4］ブクレコ、http://www.bookreco.jp
［5］Path、https://path.com/

